

お忘れ物総合取扱所

池松 孝子

先日、東京駅改札口にパスモをタッチした時「入場の記録がない」と機械に言われた。どうせまたアクシデントだろうと、もう一つのパスモを投入、事なきを得たと思っただ。しばらくしてスマホに覚えのない発信者の着歴があったが無視した。その後、再度同じ番号からの着信があった。「パスモを拾得しております」と。頭の中に東京駅改札口での一件がよぎった。

私のパスモはすぐに東京駅に向かわなければ明朝、お忘れ物総合取扱所に送られるとのことだった。今日のことにはならないとそのままにしたが、いかに無頓着な私でもすぐに動かなきゃと心配になった。

翌朝、早々に昨日の東京駅の着歴番号に電話した。朝八時だったが「飯田橋駅構内のお忘れ物総合取扱所に配送中です。そちらに行ってください。数日間そこに保管され、以降は警視庁遺失物センターに移送されます」と私の忘れ物の9桁の番号を教えられた。

取扱所に入ると数人の「客」が番号札を持って待っていた。隣で、財布を忘れた客と係員とで現金を札、コインの種類まで確認している。「免許証だけでも返ってくれたらと思ったの」と恐縮し「お礼はどうしましょうか」「不要です」とのやり取りが聞こえた。次は父親に連れられた小学生の男の子。「忘れ物は?」「水筒」「名前は書いてある?」「はい」その後、数分で奥から出てきた。「ありがとうございました」と言っているのは駅員の方だ。

東南アジアからの国費留学生を担任していた時のこと。その一人が来日して翌日、公衆電話ボックスに外国人登録証の入った財布を忘れた。授業を始めて間もなく、近くの警察署から財布が届いていると連絡が入った。クラス中が拍手喝采。彼を慰めた。彼の第一声は「日本の警察は信用できる」だった。自分の国では車の運転時には、警察官のポケットに入れるためのお札を常備しているのにと。

忘れ物取りに行きたや若き日へ

人間の悲しい性さがです忘れ物

巖窟王